

一般演題 救急 OP2-2

妊婦に対する高気圧酸素療法の現状

○柳川洋一 長澤宏樹 前川ちひろ 田中規子
谷口裕亮 河合健司 濱田通果 太田宗一郎
境 達郎 大坂裕通 大森一彦
順天堂大学医学部附属静岡病院 救急診療科

当院で妊婦の腸閉塞の患者の高気圧酸素治療依頼があった。妊婦に対する高気圧酸素治療経験が当院ではなかったため、胎児の影響が判明しないと判断し、実施しなかった。実際に妊婦に対する高気圧酸素治療の現状を調査するために文献的検索を行った。方法はPubMedを用いて、hyperbaric oxygen, pregnancyの検索用語を用いた。調査対象は妊娠した症例に対して高気圧酸素治療を行った報告とした。除外項目は英語でない言語の論文とした。調査結果は症例報告10本、原著3本、総説7本であった。その大半は一酸化炭素中毒に罹患した妊婦に対する高気圧酸素療法の有用性や必要性を示した内容であった。その理由として、胎児ヘモグロビンは母体のヘモグロビンと比較して、酸素解離曲線は左にシフトし、一酸化炭素への親和性は3倍高く、CO-Hbの半減期は4倍の時間を要し、例え一酸化炭素中毒の母体が安定していても、胎児には障害が発生している可能性があるためとされている。少なくとも、胎児が健康的に成長するためには母体の呼吸、循環等の生命徴候の安定は重要だと考えられるため、疾患罹患により母体の生命が危険に晒され、その疾患治療に対する高気圧酸素療法の有用性が明らかな場合には、妊婦に対する高気圧酸素治療は絶対禁忌ではなく、母体優先の治療を施すことが胎児の正常な成長に繋がるのではないかと推察された。